

爵制の淵源

―戦国期以前からの検討―

松 島 隆 真

はじめに

中国古代史における爵としては、周代の諸侯が有した公・侯・伯・子・男の五等爵^①と、秦漢時代における人民一般にまで与えられる二十等爵^②が取りあげられる。そのうち西周期の五等爵は近代以降その実在が疑われ（傅斯年一九三〇、郭沫若一九三二）、春秋期の国際秩序のなかで次第に形成されたとの見解もあつたが（小川一九三七）、現在それは『春秋左氏伝』（以下『左伝』）より確認されるもので、春秋期においても一連の体系ではなかったとされる^③。一方で秦漢時代の二十等爵制についてもほぼ前後して考察が開始され（勞貞一九三四、鎌田一九三八、栗原一九四〇―四二）^④、本来的な形態は軍功爵とされていたが（守屋一九六八）、西嶋定生氏は民爵賜与を焦点に据え、統一国家の皇帝支配を探る手がりかりとして理解した（西嶋一九六一）。かかる爵の制度的淵源について、か

つて「爵の伝統的性格」が議論されたが、西嶋氏はそれを「共同飲酒儀礼」に規律される秩序に見、軍功爵として運用されていた場合も、爵の本質的な性格を損なうものではないとした（西嶋一九六二）。一方、籾山明氏は西周金文をも踏まえ、むしろ周代以来の軍功褒賞こそが「爵の伝統的性格」だとして西嶋説を批判した（籾山一九八五）。

さて近年、秦漢史においては、出土文字資料の出現の結果、西嶋説は成立困難になった⁽⁵⁾。しかし民爵については、戦国期以前は軍功爵であることを前提としたまま、秦漢時代における「輕濫化」が論じられる⁽⁶⁾。戦国期の爵については現在、鷺尾祐子氏が爵・禄・事（職事・对国家奉仕）の結合こそが本来的な様態であったとしたが（鷺尾二〇〇九一二六―一二七頁）、爵制の起源を商君（商鞅）変法に見るか否かにかかわらず、軍功爵であることを本質として見る状況はつづく。だが、そこには変法以前の状況への考察は窺えない。戦国期以前の爵はいかなるものであったのか。本稿は、その検証を試みるものである。

筆者はかつて、高祖劉邦が皇帝推戴後も諸侯国の人民の爵位を自己の意志で操作できなかったことを指摘した（松島二〇一〇）。そのことは、前漢前期においては爵を媒介とした皇帝による全中国人民の「個別人身支配」が達成できていないことを示す。爵は、各国別に存在するものであった。先秦時代の爵制も、その観点から考察される必要がある⁽⁸⁾。もとより本稿は、あくまで各時期の資料に見える「爵」を表面的に概括したものに過ぎない。しかし、かかる作業は戦国・秦漢以降に繁茂する爵制の様相とその意義を明らかにするために必要なことでもあらう。

第一章 西周期の「爵」

殷周時代には、爵と呼ばれる青銅器が存在していたとされる。もともと林巳奈夫氏は、一般に爵と呼ばれる温酒器が同時代的に「爵」と称された証拠はなく、ただその器物を指す象形文字が、現行の爵字の構成要素の由来になった可能性を指摘する（林一九八四・六一～六三頁）。なお、林氏が論拠とした事例には、以下に取り上げる象白戎殷盞・師克盞・毛公鼎の銘文もある。西周期における爵の衰退と飲酒器としての杯の登場は早くから認識されていたが、林氏は杯こそが伝世文献に見える爵とする（林一九八四・一四〇～一四五頁）。また籒山氏は、賜爵という行為を、飲酒器を介して一献を賜う儀礼と考えている⁽¹⁾。

文献に「爵」が見える場合は、どうだろうか。まず、現行本『尚書』の今文系テキストに「爵」字は確認されない。また『詩』の場合、幽王期のもたとされる小雅・角弓に「爵を受くこと譲らず」とあり、毛伝は「爵禄」と理解する⁽²⁾。もつとも、『礼記』坊記は「觴酒豆肉、譲りて悪を受くるも、民猶お齒を犯す。衽席の上、譲りて下に坐するも、民猶お貴を犯す。朝廷の位、譲りて賤に就くも、民猶お君を犯す」と述べたうえでこの詩を引用する。ここでは「爵」はあくまで酒を満たした觴^{さかづき}であり、並列される「衽席」も「朝廷」もそこから類推したものであろう。「爵禄」とのみ理解する必然性はない。なお、爵をめぐる争いとして『左伝』に「虢公器を請い、王之に爵を予う。鄭伯（厲公）是に由りて始めて王を惡む」（莊二十一（前六七三）—A）とある逸話がある⁽³⁾。

一方『詩』には、器物としての爵と看做し難い事例も確認される。例えば大雅・桑柔には「爾に憂恤^{なんじ}を告げ、爾に爵を序することを誨^{おし}う」との文がある。桑柔につき、毛序は芮伯による厲王批判とし、『左伝』も芮良夫の詩

とするように、伝統的に西周後期のものとされる。他方、「序爵」につき鄭箋は、賢人を登用しその序列を明らかにすべきことを説いたとするが、その解釈ははたして妥当なのかの検証が求められよう。

同時代資料である金文はどうだろうか。⁽¹⁶⁾ 器物ではない爵の事例として、かつて籒山氏は師克盥・毛公鼎など六例があるとしたが（籒山一九八五・六頁）、現在確認できる限り『殷周金文集成』（中国社会科学院考古研究所編一九八四・九〇。以下、集成と記載）に八器、⁽¹⁷⁾『新收殷周青銅器銘文暨器影彙編』（鍾柏生・陳昭容・黃銘崇・袁國華二〇〇六。以下、新収）では五器ある。⁽¹⁸⁾ 当該字につき楊樹達氏は「勳」の意味で解する（楊樹達一九五九・二〇頁）。もともと楊氏は、「彝」字を「搢」とする孫怡讓『古籀餘論』卷二の見解を採用しており、白川靜氏もそれに依拠する（白川二〇〇四・一〇五・五四五頁）。ただ、白川氏もこの字につき「爵を執つて飲至策勳する意を示したものと思われる。勳は後起の形声字である」と述べる（六五三頁）。そして籒山氏は楊説に準拠しつつ爵を「勳」と理解し（籒山一九八五・六頁）、張亜初は『殷周金文集成引得』（張亜初二〇〇〇）において「彝」・「爵」・「爵」字を、器物を表わす「爵」字とは別に排列し、「勳」（勳）と読むべきものとした。「彝」を「爵」とすることは現在では概ね通説になっており、本稿もそれに依拠して考察を進める。

さて、金文における「彝」字の殆どは、「爵（勳）勤大命」ないし「有爵（勳）于周邦」のかたちで見える（白川二〇〇四・一〇五・六五二・六五三頁）。「爵勤大命」の事例は、単伯昊生鐘（集成八二・西周中／晚期⁽¹⁹⁾）・毛公鼎（集成二八四一・西周晚期／ⅢB）があり、四十二年速鼎（新収七四五・西周晚期）・四十三年速鼎（新収七四七・西周晚期）・速盤（新収七五七・西周晚期）にも確認される。

「有爵（勳）于周邦」の事例は、𠄎白戎毀盥（集成四三〇二・西周中期）・師克盥（集成四四六七・西周晚期）・師克盥蓋（集成四四六八・西周晚期）のほか、前掲の四十二年速鼎・四十三年速鼎があり、また成王五（前一〇二三）

年の紀年を持つ剋尊（集成六〇一四 西周早期／I A）には、「有爵（勳）于天」とあり、共和元（前八四二）年の紀年を持つ師毀（獸）毀（集成四三一一 西周晚期）には「有爵（勳）于我家」とした事例がある。²⁰ 両者とも、該当箇所は基本的に「王若曰」の文言のあとに記載され、師毀毀にしても「伯蘇父若曰」とこのとき王を代行していた伯蘇父（共伯和）が登場する。²¹ 単伯昊生鐘の場合は「単伯昊生曰く、不顯なる皇祖烈考、先王を遯匹し、大命に爵勤せり（単伯昊生曰、不顯皇且刺考、遯匹先王、爵勤大令）」と自称だが、それも先王に関連づけられる。なお単伯昊生鐘の作器者と、一連の速鼎や速盤の作器者は同族である（松井二〇〇五八頁）。

さて、「有爵（勳）于周邦」とある金文、より正確に言えば、「乃の祖考自り周邦に爵有り（自乃且考有爵于周邦）」（皐白或毀蓋）・「乃の先祖考周邦に爵有り（乃先且考又爵于周邦）」（師克盥）と作器者の祖先の業績と結びつけて表現される銘文については、すでに籒山氏が師克盥の「王身を干害（干吾）し爪牙と乍り（干害王身乍爪牙）」との文に着目し、軍事的な直接奉仕に伴うものと理解した（籒山一九八六頁）。

着目すべきは、むしろ「祖考」、そして「周邦」である。松井嘉徳氏によれば、「周邦」の語は、「四方」と対置されるもので、周王の全支配領域は、「周邦」を含めた「万邦」によって構成される（松井二〇〇二二三頁）。かかる「周邦」の語は西周中期以降に出現し、皐白或毀蓋はその最古の事例のひとつである（吉本二〇〇七一九頁）。また、師毀毀に「乃の祖考我家に爵有り（乃且考又爵于我家）」とある「我家」は、「王家」に相当するだろうが、異論もある。²² 「王家」の指し示す領域は、「王身」よりも大きいが、「周邦」よりも小さい（松井二〇〇二二三頁）。他方、宣王期の作成にかかる四十二年速鼎・四十三年速鼎（前七八六・前七八五）にはともに「乃の先聖祖考先王を夾召（紹）し、大命に爵勤して、周邦を奠む（乃先聖且考夾饗先王爵董大令奠周邦）」とあり、これも「周邦を奠」めることに直結していた。「周邦」が登場しない毛公鼎にも、「爵（勳）勤大命」の前後に「我

が有周を配す（配我有周）・「我が有周を臨保す（臨保我有周）」とある。これらの銘文から見える限り「爵（勲）」は、「周邦」と関連づけられ、かつ祖先から受け継がれるものだった。⁽²³⁾

また、作器者の称谓には、「毛公」・「冢白」・「單伯」と、公・伯が見える。吉本道雅氏に拠れば、公ないし伯（白）・仲（中）・叔・季の排行に由来する称谓は内諸侯（邦君）が有するもので、冊命金文においては受命舎を介添する右者となりうる人物であり、王の執政団を構成していたという。⁽²⁴⁾ また金文において「侯」と称するのは外諸侯のみで、内諸侯は基本的に「邦君」と称されていたことから、佐藤信弥氏は専ら「邦君」の語を用いる。⁽²⁵⁾ かかる「邦君」は、「諸侯」よりも「周邦」に近い存在であった。⁽²⁶⁾ 王は彼らの「爵（勲）」を語り得、時には彼らも自身の「爵（勲）」を誇った。他方、先に見た『詩』大雅・桑柔の作者とされる芮良夫につき、毛序は「芮伯」〔『史記』周本紀は「大夫」とする。詩の内容は当時の治世に批判的な立場からだが、そこに「爵」が登場するの偶然ではないかもしれない。なお、「師」は、冊命金文の受命者として登場する例が多く（ただし冊命金文は四十三年逯鼎のみ）、祖先の武功が嘉された師克をはじめ「周邦」に近い存在である。

一方、西周前期の矧尊には「天に爵有り（有爵矧天）」と、「爵（勲）」を「天」に結びつけた事例もある。ただこの青銅器は、「中或」（中國）のように金文においては孤立的な語彙を用いる（吉本二〇〇七 一七頁）。「爵（勲）」と「天」を結びつける用法も同様に継承されなかったのだろう。

西周中期以降「爵（勲）」が再び見えるが、このころ考古学の知見より儀礼面での改革が確認され（ファールケンハウゼン二〇〇六）、冊命儀礼が創出された（佐藤二〇一四第六章）。「周邦」とリンクする「爵（勲）」の登場も、それと関連したものだろう。それは「祖考」の顕彰をとまなうものであった。もともと、「爵（勲）」を父祖の功業（の記憶）とした場合、所謂外諸侯のような「周邦」から遠い存在に対しても排除されるものではないが、現

在確認される限り、外諸侯作器の金文に「爵（勲）」は見えない。⁽²⁸⁾

以上、先学の知見に準拠しつつ西周期の「爵（勲）」をなぞったが、そこに戦国・秦漢の爵に通底するものはあるだろうか。漢代において皇帝の頒布する爵は必ずしも諸侯王国の民に及ぶものではなく、武帝期以降に一元的中央集権体制が確立してのちも、諸侯王国の爵は存在しつづけた（松島二〇一八第一章・第三章）。「周邦」と結びつく西周期の「爵（勲）」は、その源流にも見える。だが、もとより西周期の「爵（勲）」は、はたして「爵制」といえるのか。そもそも、金文に「爵（勲）」が散見する時代においては、「蔑歴」も頻見していた。「蔑歴」とは、佐藤氏に拠れば、「目上の者が目下の者に対して賞賜を行う際に、その功績を称え、それに付随してその父祖の功績を回顧することにより、君臣や上司・部下の関係を再確認する儀節」（佐藤二〇一四 一七〇頁）である。⁽²⁹⁾祖先の功業の回顧として登場する「爵（勲）」とは異なり、個別の功績に対応した具体的な行為である。また、西周期の「爵（勲）」が祖考との関係においてのみ語られるという性格を併せ考えれば、戦国秦漢の爵制の源流を西周に求めることは、慎重であるべきだろう。

第二章 五等爵制形成の前提——春秋期以降の爵（1）——

管見の限り、春秋期以降は金文に「爵（勲）」の語を確認できない。春秋期において、爵の存在感は決して高くないようである。戦国期に成書された伝世文献においても、『論語』や、『春秋』経文のような比較的古い文献に「爵」の字は見えず、『子思子』四編（坊記・緇衣・中庸・表記）・檀弓・曲礼・玉藻・内則・少儀といった『礼記』の作成年代の早い諸編や『左伝』・『国語』において、ようやく確認できるようになる。⁽³⁰⁾

さて、爵といえば五等爵制だが、それは『左伝』において以下のように記述される。

三月、公邾儀父と蔑に盟す。邾子は克なり。未だ王命なく、故に爵を書さざるも、儀父と曰うは之を貴とすればなり。
(隠元(前七二)―2)

このように『左伝』では、『春秋』経文に見える君主の称谓を指して爵と称する。「邾子」以下が『左伝』独自の文だが、ここで邾「子」といわないと表明するのは、「子」を爵のひとつと認識するからである。同様の事例は、経文桓十(前七〇二)年の「齊侯・衛侯・鄭伯、來たりて郎に戦う」に対し、「齊人衛師を以いて之を助く、故に侵伐を稱さず。先に齊衛の王爵を書するなり」(桓十―4)と記したくだりがあるが、そこでも「侯」・「伯」を爵と認識する。また、「朝すれば班爵の義を正し」(莊公二十三(前六七二)―3)も、五等爵制を前提にした議論と考えてよいだろう。

『左伝』にいたるまでの五等爵制理念の形成については、すでに吉本氏が西周期以来の歴史的経過をたどることで、公―侯―伯―子―男のヒエラルヒー確立を論じた(吉本一九九四)。また、国君の称谓を爵と凡称することが『左伝』にはじめて確認されたことも、そこに加えるべきだろう。もつとも吉本氏も「爵」と括弧付きで表記することで、『春秋』経文以前には、国君の称谓を「爵」と凡称しなかったことを示唆する。では、「爵」の語は何処から出現したか。

前提として、まず西周の崩壊にともなう「邦君」の変容がある。「邦君」は、すでに述べたように西周期では内諸侯を指すが、春秋期以降、外諸侯を指す「諸侯」と「邦君」の質的相違は失われ、やがて漢代以降、高祖劉邦

を避諱して「国君」と凡称されるようになった。⁽³¹⁾このことが端的に表われるのが、春秋末期の孔子の言説を伝える『論語』八佾の「邦君塞門を樹つるや、管氏も亦た塞門を樹つ」である。「管氏」とは斉の管仲のことである。西周時代において斉侯が「邦君」であつたはずはない。「諸侯」と「邦君」は、いつしか混用されるようになった。そのことは、「爵（勲）」が「諸侯」に確認されない状況を変えるものだった。そして「諸侯」と「邦君」との差異が失われたことで、仮構の制度としての五等爵制出現の余地が生じたのだろう。

また、単伯昊生鐘や四十二年速鼎・四十二年速鼎・速盤の作器者である単氏が、春秋期も王朝の卿士（王官）として存続していたことから窺えるように（松井二〇〇五 一〇頁）、「爵（勲）」が王と臣下との関係性で語られる事柄であることはその後も記憶されうるものであつた。もとよりそれは推測であり、またそのことをもって爵が国君の称謂と看做しうる可能性が生じた理由にはならないだろう。

一方、『詩』大雅・桑柔には「序爵」の語がある。そして中庸に「宗廟の禮、昭穆を序する所以なり。爵を序するは、貴賤を辨ずる所以なり。事を序するは、賢を辨ずる所以なり」（第十九章）とのフレーズがあるが、それは桑柔の「序爵」に触発されたものだろう。なお、そこにおいて爵は「貴賤」を序列化するもので、鄭箋の「女に賢能の爵を序するを教う」の解釈は、「序事」のくだりを併せなければ、生じる余地はない。ただし、中庸のこの箇所は、作成時期が他の箇所よりも時代的に降る可能性もある。⁽³²⁾もともと、以下に見る坊記の記述は、中庸に先行するだろう。

坊記の「子云う、觴酒豆肉、譲りて惡を受くるも、民猶お齒を犯す。衽席の上、譲りて下に坐するも、民猶お貴を犯す。朝廷の位、譲りて賤に就くも、民猶お君を犯す、と。詩に云う『民の良無き。一方を相い怨む。爵を受くること譲らず。已れ斯に亡ぶるに至る』と」の記述は、すでに前章に見た。ここに引用される小雅・角弓

の「爵」は、あくまで「觴」であることが基本である。しかし、觴を用いた共同飲食儀礼の序列と、「朝廷」の序列が並列されたことで、両者の接合もはじまったのだろう。やがて後漢時代には爵が器物に由来することを前提に、「爵は盡なり。各々其の職を量りて、その才を盡すなり」（『白虎通』爵）といった理解が登場するが、その淵源は坊記のこの記述にあったのだろう。⁽³³⁾殷代以来の器物としての所謂爵と西周期の「爵（勲）」は、文字のうえでは全く無関係ではないものの、伝世文献に頻見する爵が杯であったことはすでに指摘される（林一九八四）。また西周金文所見の「爵（勲）」の用法に、序列性を看取することもおおよそ困難である。ただ時世に批判的であった桑柔の作者が求めた反実仮想として、現実を匡正するための手段として提示した「序爵」が、後世において爵とその序列性を「発見」させたのだろう。「天下」の語が春秋末期以降に『詩』から「発掘」されたのと同様に（吉本二〇〇七二三頁）、「爵」もまた上古の制度として『詩』から「発見」されたのである。

ただし、それらも「爵」が国君の称谓の凡称とされうる前提条件の説明にとどまる。一方、『左伝』においては、「未だ王命なく」爵を記さなかった事例（爵が無かった、ではない）や「王爵」の語があるが、それは同時に『左伝』が周王に直接依拠しない爵の存在を認識していたからにほかならない。次章に詳述するように、実際に『左伝』では、かかる爵の存在が確認できる。そして『左伝』に先行する檀弓や曲礼にも、国内の制度としての爵が確認できる。⁽³⁵⁾それも五等爵制「創出」の前提となったのだろう。

第三章 諸侯国の爵―春秋期以降の爵（2）―

『左伝』所見の五等爵とは異なる爵については、どのように認識されていたのであろうか。さて、小倉芳彦氏は

『左伝』の文章を、Ⅰ実録風の部分、Ⅱ演説的部分、Ⅲ「君子曰く」などの批評、あるいは春秋本文の句法についての説明的部分、の三つの要素よりなるものとし、『左伝』はⅠ→Ⅱ→Ⅲと段階的に形成されたとした。⁽³⁶⁾要するに、Ⅰであれば史実性が高いことになる。本稿においても、小倉氏の研究をベースに考察を進める。もつともそれは、あくまで『左伝』編纂時における歴史認識の古層部分に属するものであることは留意すべきだろう。ただ、すでに引いた莊二十一—Aの「號公器を請い、王之に爵を予う」との記述はⅠの実録風の部分に属するが、周鄭対立のきっかけとされる號公への爵の供与の場合、號公が求めたのがあくまで不特定の「器」であり、特定の器物を要求したわけではないことを伝えている。王朝と国君を媒介するものは、「爵」という名称の器物に一本化されていない。一見、五等爵制的な世界観に齟齬するが、おそらくこれが有名な事件であること、またあくまでも器物であつて制度ではないことから、存置されたのだろう。

それでは他の事例の検討に移る。まず、代表的なものが、宗廟と結びつくかたちで登場するものである。これらは、何れも器物として登場するが、先学が重視する記述であるため、あえて論及する。例えば、国君の出入国に際しては、以下のような凡例がある。

凡そ公行すれば、宗廟に告ぐ。行より反れば飲至して爵を^お含^かき勲を策するは、禮なり。

(桓二(前七一〇)—8)

このように出入国の際には、そのことを宗廟に告げるとされており、「舍爵」はそのときの飲酒儀礼の一部であり、「策勲」とあるように、軍功に対する褒賞も行なわれた。西嶋氏はこの記事につき、軍功の側面にもふれるも

の、むしろ斉懿公弑逆の顛末を記す「乃ち謀りて懿公を弑し、諸を竹中に納れ、歸りて爵を舍きて行る」(文十八(前六〇九)―3)の記事と併せて、「舍爵」を宗廟に出奔を告げる具体的行為とし、そのうえで宗廟によって統合される集団への身分的参加として位置づけた(西嶋一九六一四八四―四八九頁)。なお、文十八―3の該当箇所は実録風の箇所に対応しよう。

一方で爵Ⅱ勲と考える榑山氏は、桓二―8の事例を「まさしく主君への功勲決定が爵による飲酒と共に行なわれていることを示してはいないか」(榑山一九八五六―七頁)とし、そして「爵を舍きて行(さ)る」行為はその関係を臣下の側から一方的に切断することを意味した」(七頁)と述べる。そして、西嶋氏も軍功爵制の萌芽として論及した襄二十一(前五五二)年―Cの「(斉)莊公の勇爵」を取りあげ、⁽³⁷⁾爵制の庶民をも秩序づける身分制として整備される過程を、軍事秩序の拡大と結びつけた自説を補強した(七頁)。もともと「舍爵」の事例は、国君とその臣下との関係に限定されないこともある。

子言 辨あまねく季氏の廟に爵を舍きて出ず。陽虎 謹・陽關に入りて以て叛す。(定八(前五〇二)―15・16)

該当箇所は、実録風の部分といえよう。子言は、当時の魯国の最有力者である季桓子の弟の季寤である。彼は陽虎に連なって季氏を奪うことをはかったが失敗し、出国の際に季氏の廟に「爵を舍」いたのである。西嶋氏はこの事例にも論及し、子言の「舍爵」を同族的結合からの離脱と位置づけた(西嶋一九六一四八七―四八八頁)。諸侯国内の制度として爵が記述される場合、経済的要素を看取できる事例もある。

莊公の子、猶お八人有り。若し皆な官爵を以て賂を行ない貳を勧めれば、而して以て事濟う可きか。

(莊十四(前六八〇)―A)

これは原繁による鄭厲公の傳瑕殺害批判の一節であり、厲公の地位を阻みうる公子たちへの「賂」として、「官爵」が登場する。⁽³⁸⁾明らかに制度としての爵である。これはまた、国君が他者に爵を与えうる事例でもある。「賂」とある以上、経済的利得がともなうものだろう。土地である可能性が高いが、常識の範疇に属するためか、明言されていない。⁽³⁹⁾

さて、これに関して重要な記述が、『左伝』に先行する文献である曲礼下にある。

君子禮を行なうに、俗を變うるを求めず。祭祀の禮、居喪の服、哭泣の位、皆な其國の故の如くす。其の法を謹脩して審かに之を行う。國を去ること三世にして、爵祿朝に列すること有らば、出入國に詔ぐること有り。若し兄弟宗族猶お存すれば、則ち反りて宗後に告ぐ。國を去ること三世にして、爵祿朝に列なること無ければ、出入國に詔ぐること無く、唯だ之を興すの日に、新國の法に従う。

曲礼では、本国から離れて三世代すぎた士人について述べるが、そこでは「爵祿」が彼の本国になおも存在する場合と、すでない場合に分けて記す。この文章から判断する限り、「爵祿」は、他国にあっても持ちうる当人とその家系のプレステージであり、世襲されるものである。⁽⁴⁰⁾そして曲礼には、以下のように「田祿」の語もある。

凡そ家造するに、祭器先に爲し、犧賦次に爲し、養器後に爲す。田祿無き者は、祭器を設けず、田祿有る者は、先に祭服を爲す。君子貧しきと雖も、祭器を粥かきらず、寒きと雖も、祭服を衣とせず、宮室を爲すも、丘木を斬らず。大夫士國を去るも、祭器竟を踰えず。大夫祭器を大夫に寓せ、士も祭器を士に寓す。

ここでは「田祿」を持つ者は祭器を有し、そうでないものは祭器を設けないとされる。祭器は、売却が許されず、保有者の出国の際にも境界を越えた持ち出しは禁じられていた。要するに、祭器は国（邦）・国君と不可分の関係にある。そして、田祿・祭器の保有者は、ともに士以上の身分の者であった。両者の聯繫は、明らかであろう。

かかる士以上の身分を「爵」とする事例は、『左伝』において「爵は徳を踰えず」（成十八（前五七三）—A）・「班爵同じなれば、何ぞ以て「子」朱（晋の行人の名）を朝に黜おとしげんや」（襄二十六（前五四七）—A）・「楚靈王」其の祿爵を益して之（伍舉。当時晋に逃れていた）を復す。聲子椒鳴（伍舉の子）をして之を逆ひがう」（襄二十六—F）が確認される。

さて、先に見た莊公十四—Aは鄭、成十八—A・襄二十六—Aは晋と、周王を中心とする秩序に服していた国での出来事を記したものである。一方、襄二十六—Fは楚の事例だが、楚は周王を奉じる霸者体制の対抗勢力であった。⁽⁴¹⁾そして襄二十六—Fの文章は、これまで掲げてきた事例とは異なり、実録風の箇所に属する。そのことは、楚に独自の「祿爵」の制度があったことを示しているのだろうか。

もつともその想定は、成り立ち得ない。さて、「爵祿」の語は先に見た曲礼のほかに、中庸「子曰く、天下國家均しくするべきなり。爵祿辭するべきなり。白刃蹈むべきなり。中庸能うべからざるなり」（第九章）、緇衣「爵祿勸むに足らざるなり。刑罰恥ずるに足らざるなり」といった曲礼に先行する『子思子』諸編に確認できる。⁽⁴²⁾

一方、「禄爵」は比較的成書年代が明らかな先秦文献では『孟子』公孫丑下・『国語』晋語・『呂氏春秋』下賢にそれぞれ一件見える。これらは『左伝』に触発されたというよりも、すでにありふれた語彙であった「爵禄」の文字を入れ替えたものだろう。そして、襄二十六―Fの記述も、何らかの史実を反映した可能性こそ高いが、「禄爵」の存在を保証しえない。そもそも「爵禄」の語自体が春秋期に遡りえる語彙ではなく、別の語を「禄爵」に改めたものだろう。

以上、『左伝』に見える諸侯国の爵につき概観した。そこから見えることとして、『左伝』において爵は、周王が与える五等爵「王爵」と、各地の諸侯国内に存在する大夫以上の士を遇するものとの二段構成のものとして理解されていたのだろう。周知のように、春秋時代の身分的秩序は、一般に公―卿―大夫―士―庶人の序列を構成していた。そして、霸者体制下において諸侯国の卿の一部は、王朝の正規の認証を受けていた（吉本二〇〇五b 一六一頁）。諸侯国における卿・大夫・士の序列は、「王爵」と別個に存在するのではなく、周王を中心とする秩序の一角を成していた。例えば吉本氏は、晋が楚に対しての救宋の師を魯に乞うた際、使者として派遣された士魴の「下軍の佐」の身分を考慮して軍役の額を決めた際の臧武仲の発言に「大國に事うるに班爵を失うこと無くして、敬を加うるは禮なり」（成十八―12）とある発言を取りあげて、下軍佐（卿）の身分が王朝の「班爵」になぞらえられたとする（同上）。氏は同様の認識の存在についても『左伝』から指摘するが（吉本二〇〇五b 一七五頁）、「爵」字は確認されない。つまり、晋霸体制下における周王を中心に据えた秩序を説明する際、「爵」の語を用いねばならない必然性はない。しかし、『孟子』萬章下において周室の爵禄を問われた際、孟子は天子・公・侯・伯・子男そして君・卿・大夫・上士・中士・下士と整然とした秩序を語るが、それは霸者体制下における秩序を敷衍したものである。もとより卿・大夫・士の名称で構成される秩序は、西周期には形成されていない（佐

藤二〇一六・一六八頁）。『孟子』の「諸侯其の己を害するを惡みて、皆な其の籍を去る」とした爵制認識の淵源が春秋伝にあったことはすでに指摘されるが（小川一九三七・二七頁）、おそらく特に『左伝』に学んだ結果として得られたものであろう。

一方、管見の限り、『左伝』に器物としての爵と制度としての爵を一致させるような認識は明言されていない。同音同字であっても、安易な類推には慎重であつたのだろう。しかし、曲礼に見えるように、宗廟における祖先祭祀において国君から器物が与えられる者と、国君からあるいは「田禄」（＝「爵禄」）を与えられている者との範囲が一致していたことが、『左伝』作成者の意図を越えて両者を接合させたのであろう。

それでは、宗廟における「舍爵策勲」は、どう考えるべきだろうか。『左伝』の実録風の部分における「舍爵」は、当事者が自身の属する宗廟によって統合される集団からの離脱を告げる行為として二件確認できる。かかる祖先祭祀を共有する集団は、国（邦）であり、有力世族の「氏」であつた。

ただし、定八―15・16の「舍爵」による季氏からの離脱を告げる事例をもつて、先秦時代における国家形成以前の「氏族制」の残存を論ずることはできない。西嶋氏も自明の前提としていた殷周時代における「氏族制」の残存への批判は、すでに吉本氏が展開する。⁽¹³⁾ 一方で氏は、世族はその地位を国際的に保証され、それはのちに陳氏篡齊や三晋分裂などのかたちで国家へと移行しうるものとする（吉本一九九八・七五頁）。そうであれば季孫氏も魯国内部における国家に準ずる存在で、家臣に「爵禄」を与えることができたのだろうか。家臣への邑田賜与はたしかにあり、また世族宗主と家臣との主従関係が結ばれる場合も一定の手続きを経ていたとされ、それは「策名委質」（僖二十三（前六三七）―A）・「委質而策死」（『国語』晋語）と表現されたという（吉本二〇〇五b・二七二・二八七頁）。『委質』についてはすでに小倉氏が考察し、戦国期以降の文献に君臣関係樹立、特に他国出身

者がつかえる場合において頻見することを明らかにしている（小倉二〇〇三一二三～一二四頁）。そして『国語』晋語における中行穆子の「吾而の祿爵を定めん」との発言への鼓子の臣である夙沙釐の「臣質を狄の鼓に委ね、未だ質を晉の鼓に委ねざるなり。臣之を聞くならく、質を委ね臣と爲れば、二心有ること無し。質を委ねて死を策するは、古の法なり」との返答は重要である。「祿爵」は「委質」を経て与えられるものと位置づけられていた。

このように、有力世族は国家に準ずる存在といえるが、そのことをもって「舍爵」と爵祿を結びつけることはできない。「舍爵」の際の爵は、あくまで器物であり、『左伝』においてはそれ以上ではない。「莊公の勇爵」も同様で、臣下を鼓舞するための器物としての爵の作成と、新たな身分秩序の形成を等号で結ぶことには慎重であるべきだろう。

一方で、主従関係の成立の際の「策」は、やがて桓二一八の「舍爵策勲」の凡例の淵源のひとつとなったであろう。すでに『左伝』に先行する文献である表記に「周人禮を尊び施を尚び、鬼に事え神を敬して之を遠け、人を近づけて忠とす。其の賞罰爵列を用う」・「人の美を稱して則ち之を爵す」などとなるように、褒賞としての爵が序列性を有して登場する。表記のこの記述の持つ意義は大きい。西周期の「爵（勲）」とは異なり、祖先の功績として語られるのではなく、同時代における個別的業績を賞するものとなっている。必ずしも軍功とは限らないものの、これは間違いなく功績にもとづく爵制を示唆するものであった。『左伝』の「舍爵策勲」を春秋期の一般例とはできないものの、それは『左伝』の意図を越えて、器物としての爵と褒賞制度の接合させる言説の淵源となったのだろう。

おわりに

以上、西周期から戦国初期までに至る「爵」を概観した。その結果として見えたことは、まず、西周期における「爵」は、後世の二十等爵制と直接的に繋がる可能性が低いことである。ただ、『詩』を媒介に戦国期の言説空間に形を変えて「復活」したのである。それが五等爵制概念と二十等爵制の原型となる諸侯国の爵禄概念だが、厳密に言えば五等爵概念よりも、諸侯国の爵禄概念の方が先行して出現したのである。

「はじめに」で述べたように、戦国期以前の爵制につき鷺尾氏は、『国語』晋語における叔向の発言⁽⁴⁾を根拠に、本来的には「爵禄事」が一体であったとした(鷺尾二〇〇九二二六―二二七頁)。かかる見解自体には、筆者も異論はない。ただ、爵・禄・事が一体であった以上、三者は本来的には区別されていなかったと考えるべきであろう。本稿に見た曲礼における「爵禄」の記述では世襲は自明だが、そこにおいて「事」は、祖先を含む過去の業績であるとともに、子孫を含む未来への期待であった。そして西周期の「爵(勲)」の語からは看取できない、経済的な裏付けがあった。

さて、爵禄事の結合が語られるのは、先掲の『国語』晋語だが、それは韓宣子が「二公子(秦后の子と楚公子干)の祿」を問うたことへのこたえとして提示されたものであった。「爵禄」あるいは「爵」との語彙で表現される制度は、本来的には『論語』にも見える「禄」の語で事足りるもの―つまり、地位の保証はすなわち財産の保証―だったのではないか。⁽⁴⁵⁾「爵」はもとより『詩』に由来する雅称だったのだろうが、「爵」の出現は、地位とそれに対応する経済的保証との、言説面における切り離しを可能にした。そして、周王を中心に据えた整然たる秩

序が仮構されるなかで、「爵」の語をもつて国君たちの地位も説明されるようになったのだろう。

それでは何故、「爵」が普及したのか。おそらく、春秋後期以降の政治的社会的変動の結果、国君が新規の人材登用を必要性とし、それに応えたのが孔子とその学統を継ぐ士であったことが関わるのだろう。⁴⁶ 爵の概念は、人材登用の枠の拡大や柔軟化を要求する側に都合の良い言説であった。やがて爵の語は、睡虎地秦簡に「軍爵律」などが確認されるように、公的な用語として定着する。そこに至るまでの過程は今後の課題だが、少なくとも『詩』が何らかの寄与をはたした可能性はあろう。『詩』の権威性は、孟子の時代にはすでに諸侯にも共有されていた（山田二〇〇四一九頁）。

一方、爵の語で表わされる概念は、卿・大夫・士の身分序列だったが、それはやがて二十等爵の爵称の由来になったとされる。このことは劉劭「爵制」（『続漢書 百官志五注』）に見える伝統的な言説だが、例えば楊寛氏が秦爵の庶長が中原の卿に相当すると述べるように（楊寛一九五五二七頁など）、近代以降も踏襲された。そして『二年律令』の出現により、二十等爵が卿・大夫・士のヒエラルヒーで把握されていたことが概ね確認された（邢義田二〇〇三）。そのことに、爵概念の普及をもたらしたのが儒家であったことを重ね合わせると、戦国秦漢の爵制が本来的には軍功爵であったという見解にも、再考の余地が生ずる。儒家の語る「爵」が国家による人材登用の拡大に帰着するのであれば、それは士・大夫への身分的参加であって、軍事のみに限定されるものではないはずである。そして、現実には軍事優先の爵の運用、軍功が貴ばれる社会風潮が形成されたのは、戦国初期の儒家の思惑を越えるほどの社会的変動が発生したからにほかならない。また、そのような動きのなかで、かつては想定された国（邦）内部に属する政治組織の領袖たる世族宗主による「爵祿」の頒布もなくなっていたのだろう。その過程を、各国の国制の様相とリンクさせて理解することもまた、今後の課題となろう。

- (1) 『孟子』萬章下「北宮錡問曰、周室班爵祿也、如之何。孟子曰、其詳不可得聞也。諸侯惡其害己也、而皆去其籍。然而軻也、嘗聞其略也。天子一位、公一位、侯一位、伯一位、子男同一位、凡五等也。君一位、卿一位、大夫一位、上士一位、中士一位、下士一位、凡六等……」。
- (2) 『漢書』百官公卿表上「爵。一級曰公士、二上造、三簪褭、四不更、五大夫、六官大夫、七公大夫、八公乘、九五大夫、十左庶長、十一右庶長、十二左更、十三中更、十四右更、十五少上造、十六大上造、十七駟車庶長、十八大庶長、十九關內侯、二十徹侯。皆秦制、以賞功勞」。
- (3) 吉本一九九四。五等爵の不在については、近著である吉本二〇一三(三二)―(三三頁)、二〇一七(三一―三八頁)でも詳論される。
- (4) なお、専論ではないものの、宮崎一九三三にも二十等爵に論及した箇所がある。
- (5) 西嶋説の根幹は郷里社会における「共同飲酒儀礼」の際の年齢的秩序の可視化だったが、張家山漢簡『二年律令』に爵位の通減的世襲規定が発見され、爵位と齒位的一致は充分に成り立ちえなくなつた(宮宅二〇〇六など)。もっとも、すでに布目
- 一九六二が西嶋著書の書評において『居延漢簡』を用いて若年での高爵者の存在を明らかにし、爵位と齒位の一一致に疑義を呈している。他方、爵位ともなう刑罰減免の特権は、富谷一九九八が爵の存在が必然的に刑罰減免を導くわけではないとしたが、実際には爵にともなう刑罰減免が適用されないのは吏に對してのみであつたと、筆者は考えている(『前漢前期の爵制と国制』二〇一七年度東洋史研究会大会発表)。
- (6) 高敏一九八二、朱紹侯一九九〇、二〇〇八。もっとも楯身二〇一六のように、「輕濫化」論を踏まえつつ、民爵の意義を「漢人になること」と積極的に意義づける研究もある。なお楯身著書については、筆者も書評しているので参照されたい(松島二〇一七b)。
- (7) 商君変法につき吉本二〇〇〇は、一連の改革とされる出来事が実際には長期間にわたるものであつたこと、特に先行研究において重視されていた阡陌制は漢代まで商君と結びつけられていなかったことを指摘する。一方、吉本二〇〇〇は爵制に基本的に触れていないため、森谷二〇〇一は軍功爵制の導入を商君によつてなされたものとする。また佐川二〇一三も、秦漢の爵の本来の様態を軍功褒賞とし

ている。

- (8) 戦国中期以前の爵については、すでに松島二〇一八に概略した(二二・三三―三三三頁)。

- (9) 魯侯爵(集成九〇九六)と呼ばれる青銅器もあるが、林一九八四は偽器とする(二〇八頁)。

- (10) 濱田一九三三。これを受けて西嶋氏は、かつて「爵が」盛行したのは殷代から西周にかけてであり、現在遺物からみるかぎりそれ以降この爵形青銅器は衰退してしまい、遺物としての飲酒器は爵から杯に移行するのである。それ以降にもかかわらず爵は依然として飲酒器の名称として使用されている」

- (西嶋一九六一・四四六頁)・「漢代墳墓から頻繁に出土するかの耳杯と爵の関係のごときは、現在のところまったく不明である」(四四七頁)と述べた。なお、現在、ファルケンハウゼン二〇〇六は爵をはじめとする酒器の衰退を踏まえて、祖先祭祀における飲酒儀礼の消失などの「西周後半期礼制改革」を提唱している。

- (11) 榑山一九八五・一〇頁。なお、榑山氏は「爵」を「柄杓型の飲酒器」と考えており、杯とは看做していないようである。

- (12) 『毛詩正義』小雅・角弓序「角弓、父兄刺幽王也」・伝「爵禄不以相讓、故怨禍及之」。なお本稿に

引用する『詩』は白川一九九八に依拠するが、「爵」字の理解は筆者と異なる。

- (13) この逸話は、僖二十四(前六三六)―2にも論及される。なお、本稿で『左伝』を引用する際は、小倉一九八八―八九に基づく分類記号を併記する。数字は経文と対応するもの、アルファベットは対応する経文のないものである。また、初出時に西暦年を挿入した。

- (14) 『毛詩正義』大雅・桑柔序「桑柔芮伯刺厲王也」。『左伝』「周芮良夫之詩曰「大風有隧。貪人敗類。聽言則對。誦言如醉。匪用其良。覆俾我悖」」(文元(前六二六)―B)。

- (15) 『毛詩正義』大雅・桑柔「箋云……教女序賢能之爵」。

- (16) 本稿に引用した金文の釈読は、基本的に張桂光二〇一〇にもとづく。また銘文の解釈については、白川二〇〇四―〇五に集録されているものも特に参照した。

- (17) ただし善殷(集成三〇三七・殷)は、「爵」一字のみのため、ここでは考慮に入れない。

- (18) ただし、米国セントルイス市所在の個人蔵の師克盃(新収一九〇七)につき、劉雨・盧岩二〇〇二(五〇七)は蓋の銘文を偽刻とする。これを除けば、

「爵（勳）」が確認される事例は、二〇〇三年に陝西省眉縣楊家村の窖藏より発見されたもののだが、『文物』二〇〇三・一六、これについての考察には、松井二〇〇五、二〇〇八がある。

- (19) 中国社会科学院考古研究所編一九八四・一九〇は西周晚期とするのに対し、張桂光二〇〇〇は西周中期とする。林一九八四に断代案が見える場合、それも併記するが、「西周」は割愛する。

- (20) 紀年の明らかな西周青銅器の断代については、吉本二〇〇四。

- (21) ただし佐藤二〇一六は、師毀（獸）毀は伯蘇父が冊命儀礼の形式を模して自身の領地と各種の人員を家臣に命じたもので、「我家」も伯蘇父自身の家の事を指すと考えている（二一八―二一九頁）。

- (22) 註（21）を参照。

- (23) 金文所見の王と臣下のあいだでの賞賜と彼らの祖先との関係は、小南二〇〇六を参照。

- (24) 詳細は吉本二〇〇五b第一章。なお、「伯」の称谓は、外諸侯に従属する君主にも用いられることがあった（吉本一九九四・五頁）。

- (25) 佐藤二〇一四、二〇一六。「邦君」の具体的様相については、佐藤二〇一六（五三―五七）。また「邦君」は『詩』小雅・雨無正の「邦君諸侯、莫肯朝

夕」において「諸侯」とは明確に区別され、その認識は戦国期においても存続していたことは、清華簡『繫年』の「諸侯・邦君」との文からも分かる。清華簡『繫年』については吉本二〇一三を参照。

- (26) 内諸侯（邦君）の支配領域も「邦」と称されていた（吉本二〇〇五b・五九頁）。

- (27) 冊命金文・冊命儀礼については吉本二〇〇五b第一章、佐藤二〇一四第六章。

- (28) なお白川氏は、「勳（勳）」字が用いられた青銅器の例として孫氏の見解を引き、毛公鼎のほか、泉伯或毀・師獸毀・單伯鐘（單伯昊生鐘・陳侯毀があるとする（白川二〇〇四・一〇五・一〇六・一〇七頁）。「孫氏」は孫怡讓と推測され『古籀餘論』卷二の魯侯角の条に該当する記述があるが、そこに師獸毀は取りあげられていない。なお陳侯毀はここでは戦国期田齊威王の作器にかかる陳侯因資敦（集成四五四九）であるが、時代が大幅に下るため、検討の対象にはなりえない。なお魯侯角は魯侯爵とも称されるが、林氏はこれを偽作と看做していることは註（9）に触れた。

- (29) もっとも「蔑歴」も西周晚期には修辞になったようである（佐藤二〇一四・一七一頁）。

- (30) 本稿に論及した各文献の成立年代は、吉本一九八

九、一九九〇、一九九二、一九九五、二〇〇二、二〇一四、山田二〇〇四、二〇〇五、二〇〇六を参照。また『子思子』諸篇については、かつて武内一九八四が詳論している。ただし、少儀に見える爵はあくまで器物である。一方、本稿で検討しなかったが、内則には「五十而爵」との文があり、鄭玄は王制に「賢者命爲大夫」と注する（『礼記正義』王制。「五十而爵」を含む内則の養老に関するくだりは、王制にそのまま引用される）。なお、以下本文に挙げた『礼記』諸編を引用する場合、特に『礼記』は冠さない。

(31) 佐藤二〇一六一五一頁。すでに吉本氏も、西周時代の特定の内諸侯の外諸侯化を、五等爵ヒエラルヒーの形成の一段階として記述している（吉本一九九四七頁）。また漢代以降、伝世文献の「邦」の大半が「國」に置換されたことについては、吉本二〇〇五b（一九七頁）。

(32) 山田二〇〇五に拠れば、中庸第十九章の成書時期は前四世紀であるとする（一一五～一二七頁）。ただし「宗廟之禮、所以序昭穆也。序爵、所以辨貴賤也。序事、所以辨賢也。旅酬下爲上、所以逮賤也。燕毛、所以序齒也」の文につき、かつて武内義雄氏は中庸の本文ではなく注であつたとし（武内

一九八四三八頁）、山田二〇〇五も「序事」の語は『周礼』まで確認されず、本稿に引用した箇所は前三世紀後半頃に一定の改変を受けた可能性にも触れている（一四二頁）。

(33) なお、榑身智志氏は、本文に掲げたの『白虎通』などの記述をもとに、職事と飲酒を結びつけるかたちで、漢代における爵制を理解している（榑身二〇一六五八五～五八六・五九八頁）。もつとも、管見の限り、戦国初期においては玉藻に「侍食於先生、異爵者後祭先飯」とあるように、私邸における祭祀の際に当事者の爵の高下が関わることはあつても、飲酒儀礼の序列が爵位になったとの言説は確認されない。

(34) 「王爵」の語は、隠十（前七二三）―2・3にも確認される。

(35) 檀弓下「邾婁定公之時、有弑其父者。有司以告、公瞿然失席。曰、是寡人之罪也。曰、寡人嘗學斷斯獄矣。臣弑君、凡在官者殺無赦。子弑父、凡在宮〔官〕者殺無赦。殺其人、壞其室、洩其宮而諸焉。蓋君踰月而后舉爵」。檀弓については吉本一九九〇。また檀弓が曲礼に先行することは、吉本一九九五（一三八～一三九頁）。曲礼所見の爵については本文に記す。

(36) 小倉一九六三・二四～二五頁。小倉二〇〇三・六八

～七三頁。なお山根二〇〇四、二〇〇五、二〇〇九は小倉氏のかかる見解を批判し、I・II・IIIのすべての部分にわたって特定の一人の作者の手が入っているものとした。

(37) 西嶋氏の「莊公の勇爵」についての議論は、西嶋一九六一（四八九～四九六頁）。そこで氏は「勇爵」はあくまで飲酒器としつつも、軍功爵制の萌芽として評価する。

(38) 『左伝』に見える「賂」については、小倉氏がこの事例も含めて取り上げるが（小倉二〇〇三・九四～一〇九頁）、特に傳十五・12における晋献公の事例を取り上げ、国君と大夫とのあいだに主従関係が結ばれる際にも「賂」が登場したとする（九八～九九頁）。また斎藤道子氏は、傳三十（前六三〇）13と哀二十七（前四六八）1Eには「卿の身分」が「賂」となった事例にも触れる（斎藤二〇一五・三～五・一〇頁）。

(39) なお、「賂」一般に関する議論ではあるが、小倉氏は、春秋後期には田土も「賂」として用いられることもあったとする（小倉二〇〇三・一二・一一六頁）。

(40) このことは、すでに松島二〇一八において触れた

(三三二～三三三頁)。

(41) 楚の霸権については、山田一九九八を参照。

(42) 中庸については山田二〇〇五が詳論するが、引用箇所は比較的古い部分である。

(43) 吉本二〇〇五b。特に春秋期の世族については、第二部の中編第三章が詳論する。

(44) 『国語』晉語「秦后子來仕、其車千乘。楚公子干來仕、其車五乘。叔向為太傅、實賦祿、韓宣子問二公子之祿焉、對曰『大國之卿、一旅之田、上大夫、一卒之田。夫二公子者、上大夫也、皆一卒可也』。

宣子曰『秦公子富、若之何其鉤之』。對曰『夫爵以建事、祿以食爵、德以賦之、功庸以稱之、若之何以富賦祿也。夫絳之富商、韋藩木榱以過於朝、唯其功庸少也、而能金玉其車、文錯其服、能行諸侯之賄、而無尋尺之祿、無大績於民故也。且秦・楚匹也、若之何其回於富也』。乃均其祿。

(45) 『論語』為政「子張學干祿。子曰『多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤。多見闕殆、慎行其餘、則寡悔。言寡尤、行寡悔、祿在其中矣』」・衛靈公「君子謀道不謀食。耕也、餒在其中矣。學也、祿在其中矣。君子憂道不憂貧」。もつとも『論語』の記述については、小倉氏が特にこれらの記述から孔子の「祿」のために「学」のではない・「祿」は「学」に伴う可

能性の一つ」(小倉二〇〇三・四二三頁)という認識を論ずるように、この時期において「禄」が旧来的な大夫・士以外にも開かれるようになった社会状況に対応した言説でもある。そして小倉氏は、戦国中期においてかつては当然だった官職世襲制が、世襲が容認される「禄」(采邑)と、そうではない官職を別箇のものとして認識されるようになったとする

(46) 小倉二〇〇三・四〇二頁。
吉本二〇〇五a七三～七四頁、佐原二〇一三三頁。また山田二〇〇五は、表記と概ね同じ頃に作成された中庸の古い箇所が作成された時代は、魯においては三桓氏が没落し、子思自身が国政を担うようになった頃だと述べる(一三五頁)。

参考文献一覧

《日文》

- 小川(貝塚) 茂樹一九三七「五等爵制の成立―左氏諸侯爵制説考―」(『東洋史研究』三一・一～二七頁、のち『貝塚茂樹著作集 第二巻』中央公論社一九九七年、に収録)
- 小倉芳彦一九六三「ぼくの左伝研究とアジア・フォード問題」(『歴史評論』一五三・一三～二八頁)
一九八八・八九『春秋左氏伝(上)・(中)・(下)』岩波書店
- 二〇〇三『春秋左氏伝研究』論創社
- 鎌田重雄一九三八『西漢爵制』(『史潮』八一)。のち『漢代史研究』(川田書房一九四九)
- 栗原朋信一九四〇―四一「兩漢時代の官民爵について(上)・(下)」(『史観』二二・一二七～五九頁、二六・七一〇九～一四六頁)
- 小南一郎二〇〇六『古代中国 天命と青銅器』京都大学学術出版会
- 斎藤道子二〇一五「春秋時代の略について」(『史学』八五・一・二三(第二分冊)一～二五頁)
- 佐川英治二〇一三「中国中古軍功制度初探」宮宅潔編『中国古代軍事制度の総合的研究』科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書

佐藤信弥二〇一四『西周期における祭祀儀礼の研究』朋友書店

二〇一六『周―理想化された古代王朝』中央公論新社

佐原康夫二〇一三『戦国諸子の士論と漢初の社会』（『東洋史研究』七二―四一―二七頁）

白川 静一九九八『詩経雅頌1・2』平凡社

二〇〇四―〇五『金文通釈』『白川静著作集別巻』平凡社

武内義雄一九八四『武内義雄全集第三卷 儒教篇二』角川書店

榑身智志二〇一六『前漢国家構造の研究』早稲田大学出版部

富谷 至一九九八『秦漢刑罰制度の研究』同朋舎

西嶋定生一九六一『中国古代国家の形成と構造』東京大学出版会

布目潮瀾一九六二『批評・紹介 西嶋定生「中国古代帝国の形成と構造―二十等爵制の研究―」』（『東洋史研究』二〇―四―一五九―一六四頁）

―四一五九―一六四頁

濱田耕作一九三三『爵と杯とに就いて』『市村博士古希記念東洋史論集』富山房

林巳奈夫一九八四『殷周時代青銅器の研究―殷周青銅器綜覧―』吉川弘文館

ファルケンハウゼン、ロータール・v二〇〇六

『周代中国の社会考古学』（吉本道雅解題・訳）京都大学学術出版会

松井嘉徳二〇〇二『周代国制の研究』汲古書院

二〇〇五『記憶される西周史―逯盤銘の解読―』（『東洋史研究』六四―三一―三三頁）

二〇〇八『はじまりの記憶―銘文と詩篇のなかの祖考たち―』（『史林』九一―一四―三二頁）

松島隆真二〇一〇『漢王朝の成立―爵を手がかりに―』（『東洋史研究』六九―二一―三〇頁）

二〇一七 a『鉅鹿の戦いとその歴史的意義―懷王の約をめぐる項羽と劉邦―』（『中国古代史論叢』九八五―一二五頁）

二〇一七 b『書評 榑身智志『前漢国家構造の研究』』（『日本秦漢史研究』一八―一四二―一五三頁）

二〇一八『漢帝国の成立』京都大学学術出版会

宮宅 潔二〇〇六

「漢初の二十等爵制―民爵に附帯する特権とその継承―」（富谷至編『江陵張家山二四七號墓出土漢律令の研究 論考篇』朋友書店）

宮崎市定一九三三

「中国古代賦税制度」（『宮崎市定全集 3』岩波書店、一九九二）

森谷一樹二〇〇一

「戦国秦の相邦について」（『東洋史研究』六〇―一―二九頁）

守屋美都雄一九六八「漢代爵制の源流として見たる商鞅爵制の研究」『中国古代の家族と国家』京都大学文学部内東洋史研究会

榎山明一九八五

「爵制論の再検討」（『新しい歴史学のために』一七八―一二二頁）

一九九一

「皇帝支配の原像―民爵賜与を手がかりに」（松原正毅編『王権の位相』弘文堂）

山田崇仁一九九八

「春秋楚霸考―楚の対中原戦略―」（『立命館文学』五五四―二四―五二頁）

二二〇四

「孟子」の成書時期について―Z-scanと統計的手法を利用した分析―」（『立命館東洋史学』二七一―二二二頁（逆頁））

二二〇五

「礼記」中庸篇の成立時期について―Z-scanモデルを利用した分析―」（『中国古代史論叢』続九七―一四三頁）

二二〇六

「周礼」の成書時期・地域について」（『中国古代史論叢』三九六―一五〇頁）

山根泰志二二〇四

「左氏述作―春秋学―」（『立命館文学』五八七―四四―五六頁）

二二〇五

「左氏述作―年代記―」（『立命館文学』五九一―一―三七頁）

二二〇九

「左氏述作―予言・評言―」（『立命館文学』六一一―一五―六五頁）

吉本道雅一九八九

「国語小考」（『東洋史研究』四八―三一―三二頁）

一九九〇

「春秋事語考」（『泉屋博古館紀要』六三七―五三頁）

一九九二

「檀弓考」（『古代文化』四四―五三八―四六頁）

一九九四

「春秋五等爵考」（『東方学』八一―一五―二七頁）

一九九五

「曲礼考」（小南一郎編『中国古代礼制研究』京都大学人文科学研究所）

一九九八

「春秋戦国交代期の政治社会史的研究」科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書（平

成七年度—平成九年度

- 二〇〇〇 [商君變法研究序説] (『史林』八四—三一—二九頁)
二〇〇二 [左伝成書考] (『立命館東洋史学』二五一—二二頁)
二〇〇四 [西周紀年考] (『立命館文学』五八六—二五〇—一九九頁 (逆頁))
二〇〇五 a [先秦] (愛宕元・富谷至編『中国の歴史』【上】—古代・中世』昭和堂)
二〇〇五 b [中国先秦史の研究] 京都大学学術出版会
二〇〇七 [中国古代の世界観] 藤井謙治・杉山正明・金田章裕編『大地の肖像』京都大学学術出版会
二〇一三 [清華簡繫年考] (『京都大学文学部研究紀要』五二—一—九四頁)
二〇一四 [国語成書考] (『京都大学文学部研究紀要』五三—一—四三頁)
二〇一七 [周室東遷再考] (『京都大学文学部研究紀要』五六—一—五八頁)
驚尾祐子二〇〇九 [秦漢の軍功爵と民爵] 『中国古代の専制国家と民間社会—家族・風俗・公私』立命館東洋史学会

《中文》

- 傅斯年一九三〇 [論所謂五等爵] (『国立中央研究院歷史語言研究所集刊』二—一—一一〇—一二九頁)
高 敏一九八二 [論兩漢賜爵制度的歷史演變] 『秦漢史論集』中州書画社
郭沫若一九三二 [金文所無考] (『金文叢考』) 郭沫若全集 考古編五』科学出版社、二〇〇二年)
勞貞一 (榦) 一九三四 [釋士與民爵] (『史学年報』二—一—二四—一—二四五頁)
劉雨・盧岩二〇〇二 [近出殷周金文集録] 中華書局
邢義田二〇〇三 [張家山漢簡《二年律令》詁記] (『燕京學報』新十五期—四五頁)
楊 寬一九五五 [商鞅變法] 上海人民出版社
楊樹達一九五九 [積微居金文說 (增訂本)] 科学出版社
張亜初編著二〇〇一 [殷周金文集成引得] 中華書局
張桂光主編二〇一〇 [商周金文摹印總集] 中華書局

鍾柏生・陳昭容・黃銘崇・袁國華編二〇〇六『新收殷周青銅器銘文暨器影彙編』藝文印書館

中国社会科学院考古研究所編一九八四―九〇『殷周金文集成』中華書局

朱紹侯一九九〇『軍功爵制研究』上海人民出版社

二〇〇八『軍功爵制考論』商務印書館

【附記】本稿は、学習院大学東洋文化研究所二〇一七年度「東アジア学」共創研究プロジェクトの助成を受け、二〇一八年六月一日の研究成果報告会において報告した「中国先秦時代の爵制と国制」をもとにしたものである。